

ずいそう

瑠璃色の地球も花も宇宙の子



山崎直子

この句は、昨年4月に、スペースシャトル・ディスカバリー号 STS-131 ミッションに従事し、国際宇宙ステーション (ISS) で働いている合間に、宇宙の姿、地球の姿を見てつくったものです。地球は、宇宙に無数に存在する惑星の一つです。しかしものすごく美しい。瑠璃色に輝いて、それ自体が活着しているようです。そしてここに住んでいる一人一人が同じようにかげがえのない命です。花にもいろんな花があり、どれもそれぞれに美しく命を輝かせています。そして花も人もみんなが、だれかに支えられ、助けられて活着しています。そして同時にだれかを助けているのです。自分ひとりだけで活着していくことはできません。

私は宇宙で二つのことが気になりました。ひとつは、人は大昔から星や月を見て感動していた、ということです。そしてもうひとつは、命のことでした。

私たちのスペースシャトルの打ち上げを見送ってくれた人が「星になって行きましたね」と言ってくれました。早朝のまだ暗い中で打ち上げだったので、最後までシャトルのエンジンが明るく星のように見えていたからでしょう。大昔の人たちも、星を見ていました。流れ星に願いをかけたり、人の命が星になって輝いているという話は、世界各地にあります。

でも、なぜこんなにも宇宙を意識するのでしょうか？ 私は「宇宙が私たちのふるさとだからではないか」と思っています。太陽のような恒星は寿命がきたときに、大爆発を起こします。そのときに、さまざまな物質を宇宙空間に放出します。その一部が、たまたま地球にふりそそぎ、長い時間をかけ、原始生物になり、そして人間も生まれました。自分の体の元になった「初めのもの」が宇宙にあると感じ、宇宙と一体となることによって、安心感を得られるのではないかと思えるのです。私も宇宙の無重力に身を置いたとき、とても懐かしい感覚を覚えました。

宇宙でもうひとつ考えたこと、それは命のことでした。ISSに乗っていると地球を90分で一周します。夜の地球を見ると、ポツポツと明るく輝いているところがあります。都会の街の明かりです。その明かりの中で、皆は今頃夕食を食べているのだろうか、などと思いました。生き物はすべて何かを食べなければ活着していけません。私たちも宇宙食を地球から持っていき

ました。しかも私たち人間の食べ物は、すべてほかの動物や植物から来たものです。私たちは命を食べて活着しているのです。「この地球で、命はいったいどこから生まれたのだろうか？」と改めてふしぎに思ったのです。材料をすべてもらさず集めても、活着した人間を作ることはできません。命は作れないのです。そして命は一人にひとつしか与えられていません。大昔の人も同じでした。命は両親からもらい授かったものです。そのたった一つの命を次の世代に伝えていった結果、いまの人たちがいるのです。

その命が協力してこそ、様々な活動が可能になります。宇宙に行くことも一人では出来ません。宇宙飛行士だけではなく、宇宙船をつくる人、それを地上から運用する人、宇宙船の点検をする人、たくさんの人がいて成り立ちます。どの分野でも同じです。夢は大きくなるほど、たくさんの人の力が必要になります。そして目に見えない部分がとても重要になってきます。

何かを実現する過程の中では、どれが正しい解なのか悩むことも多いです。数学のように解が定まっている問題もありますが、人生の中では解が定まっていない問題の方が多いです。そんなとき、私は一遍の詩をよく思い出しました。

神よ、変えることのできるものについて、
それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、
それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、変えることのできるものと、変えることのできないものを、識別する知恵を与えたまえ。

ラインホールド・ニーバー

この詩は、高校時代に英語の先生が紹介してくれました。私は何故かこの詩が気になり、授業のノートとは別に日記帳にも書いておきました。そして時折、眺めたりしていたのです。

これからも平坦でない道は続くでしょう。しかし、平坦な道がいいとは限りません。でこぼこの道を通るからこそ気づくこと、学ぶことがあるのだと思います。一步一步歩いていけたらと思います。

——やまざき なおこ 宇宙飛行士——